

白川静のことば

《37》



金子都美絵・画

生命の思想は、自然の生成力を如実に示す草木の繁茂によって象徴され、その草木にふれ、その緑なす姿を見ることによつても、その生成力を自己のうちのものとすることができるとする信仰があつた。生・産・世などは、その表象がそのまま生命を示すのである。「万葉」に多くみえる草摘み歌は、起原的には魂振りのための行為であり、かつ概ねその意味を以て行なわれ、また歌われていとみてよい。

〔万葉〕ハ一四二四

春の野にすみれつみにと来しわれぞ野をなつかしみひと夜寝にけるという赤人の歌を、たんなる自然に対する耽溺を歌うと考えるとはならない。

明日よりは春菜^{わかな}つまむと標^{しめ}し野に昨日も今日も雪はふりつつ

〔万葉〕ハ一四二七

も、上記の赤人の一連の歌であり、それは場所を定め、時期を定めて、すなわち神との約束の上になされる野草摘みであり、その約束の成就是、魂振りとしての、あるいは特定の所願を果たす条件となる。

〜中略〜

草摘みの状を示す字に、拜(拜)がある。拜の初文は擽、「説文」に「首、地に至るなり」とし、擽の音は忽^{こつ}であるというが、その音は後人の附加するところであるう。また擽が何の形であるかを「説文」は説かないが、呉大敦の「字説」に、それは華の形であり、擽とは華を抜く形、すなわち拜はその姿勢をいう字とする。

『漢字の世界2』平凡社ライブラリー 1961～2022

